

頭蓋内出血による注意障害を有する患者のバランスと歩行のためのリハビリテーション

藤井浩一

西日本リハビリテーション学院

中枢神経系障害患者は、しばしば、日常生活動作として歩行に影響を及ぼす注意障害を示す場合が多い。そこで、今回の症例報告では、頭蓋内出血後で注意障害を有する患者のバランスと歩行を改善するための理学療法について述べる。

症例紹介

患者は動静脈奇形(AVM)による続発性頭蓋内出血の診断をもつ16歳の男性であった。

急性期の病院に6か月、その後リハビリテーション病院に6週間入院の後、外来通院となった。

発症前の患者はフットボール・チームに所属するふつうの高校生であった。目標は歩行の不安定性を改善し、学校に戻りフットボールチームのラインコーチとしてチームに復帰することであった。

理学療法評価と計画

検査結果より患者の歩行不安定の因子はバランス、注意、筋力、視覚の障害であると仮定したが、その中でもバランスと注意障害が強く影響していると考えた。

歩行およびバランス練習の中で、注意障害に対して代償性技術と注意練習を含めて施行した。

代償性技術として、歩行中に注意をそらすものから再び歩行に集中させるために言語および触覚刺激を入力した。また、家族には日常生活において患者の注意をバランスと歩行に集中させるために言語で合図するように指導した。注意練習としては、複雑さを増加させるバランス作業が注意の量を増加させるという理論に基づき、環境を操作することによって、歩行とバランス作業の複雑さを段階的に増加させていった。

結果と結論

11週の外来治療にて、患者はバランス障害なしでの独立歩行が可能となった。

継続した調査は脳損傷患者においてバランスと注意の間で相互作用を決定するために必要である。そしてバランス能力の低下がある患者の最適な評価と治療は注意障害に関連があった。

Rachl S Tappn : Rehabilitation for balance and ambulation in a patient with attention impairment due to intracranial hemorrhage. Phys Ther **82** : 473-484, 2002

地域社会に住む高齢者におけるバランス自信度の信頼性

松本貴子

西日本リハビリテーション学院

転倒恐怖は高齢者の身体的な機能に悪影響を与える。しかし、本人のバランス自信度と実際のバランス能力、機能的運動能力の関連性は知られていない。

地域社会に居住する高齢者50名(65~95歳、平均81.7歳)に対して、バランス能力をBerg Balance Scale(BBS)、機能的運動能力をTime Up & Go Test(TUG)、バランス自信度をThe Activities-specific Balance Confidence(ABC)Scaleで評価した。

それぞれの評価の平均値はABC Scaleが 78.87 ± 19.08 、BBSが 46.50 ± 9.46 、TUGが 16.00 ± 14.31 秒であった。BBS、TUGの転倒危険率上昇の指標はそれぞれ45点以下、14秒以上である。ABC ScaleとBBSの間、ABC ScaleとTUGの間、TUGとBBSの間にそれぞれ強い相関が見られた。

BBSやTUGで転倒危険率が高いと分類された被験者はその他の被験者よりABCスコアが有意に低かった。このことから、バランス能力と機能的運動能力がバランス自信度に影響を与えていることがわかる。しかし転倒経験はバランス自信度低下の決定的な因子ではなかった。

バランス自信度は本人が感じているバランス能力の限界によって影響される。バランス自信度が低下している人は積極的に活動することを控える可能性がある。

理学療法士は、バランス能力の向上を目指して様々な治療活動を行っているが、転倒恐怖の疫学を理解しなければバランス自信度を向上させることは難しい。バランス自信度の動態を理解することはバランス機能障害のリハビリテーションをはじめとする多くの専門的なチームアプローチ戦略に大いに役立つ。

本研究の結果から、身体機能の低下によるバランス能力の低下が、バランス自信度に大きな影響を持っていることがわかった。このことは、高齢者の活動性低下予防のために重要な意味を持っている。

Hatch J, et al : Determinants of balance confidence in community-dwelling elderly people. Phys Ther **83** : 1072-1079, 2003